

Title	Carl Landauer著“Planwirtschaft und Verkehrswirtschaft” Mnchen, 1931. (邦訳、計画経済と流通経済 田中力訳)
Sub Title	
Author	気賀, 健三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1936
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.30, No.2 (1936. 2) ,p.277(123)- 283(129)
JaLC DOI	10.14991/001.19360201-0123
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19360201-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Carl Landauer 著

„Planwirtschaft und Verkehrswirtschaft“ München, 1931.

(邦譯:「計畫經濟と流通經濟」 田中力譯)

氣 賀 健 三

社會主義に關する議論の中で最近頗る問題視せられる様になつたものは、社會主義社會に於ける經濟的構造如何といふ問題である。換言すれば計畫經濟といふことの具體的内容である。斯様な議論が頻りに行はるゝに至つた理由は一つには實際上の事實として最近の所謂世界的恐慌の結果資本主義の行詰りが叫ばれるに至り、同時に統制經濟的な經濟政策が世界の各國に依つて採用さるゝ傾向が激しくなつたことであるが、それと同時に反面に於て反社會主義の理論家達が、假に社會主義的な計畫經濟を實行するとして、斯様な社會に於ける生産、交換、分配其他の經濟行爲は如何なる規律に従つて律せられるのであらうかといふことを經濟的に批判し始めたことが斯様な論争を生み出した一大理由であらうと思はれる。經濟學者達は之までの様に單に社會主義的組織とか計畫經濟とかといふ言葉を漠然と鵜呑みにして仕舞はないで其意味すべき具體的内容の吟味に着手する様に爲つたのである。従つて此方面に於ける理論的闘争は從來の場合と反對に資本主義的理論家の側が攻勢であり社會主義者達は受け身の形である。

此處に紹介しようとするラングウアーの著書は少數の社會主義者の積極的著作の中でも特に優れて居る書物の一つである。

此書の前半は自由交換經濟の功績と缺陷に關する批判、即ち謂はゞ消極的部分より成り、後半は社會主義的計畫經濟に關する具體的な輪廓を敘述する所の積極的主張が之を占めて居る。

ラングウアーはボルシビキに屬する社會主義者ではない。寧ろ之に反對して社會組織の漸進的改革を説く社會民主主義者である。其説く所は改革意見としては比較的穩健であり現實に對する理解は頗る着實なる觀がある。然かも從來のマルクス主義者の大多數が敢て試みやうとしなつた來る可き社會主義社會の經濟組織に就て漠然としては居るが或程度の具體的制度を描き出さうとしたのは頗る勇氣を要せる試みに相違ない。同じ民主主義者エドアルド・ハイマンは此著を以て「勇敢にして且つ有益なる書物」と呼び、同じく此言葉を引用して之に和した自由主義的の經濟學者アドルフ・ウーバーは彼の首尾一貫せる説明と現實に對する批判の適切なる次第を稱讃して居る。

此力作の内容を詳細に傳へることは僅少の紙數を以てしては到底爲し遂げることの出来るものでないから此處では單に本書の性質に就ての讀後感を記述するに止めやう。

ラングウアーの社會主義實現の爲の意見といふものは、暴力的革命を好むボルシビキの人々に比較して頗る穩健である。彼は「大戰後のあの社會化の試みがロシア以外の國々では全く取拂はれて了つたが併しそれは社會化に對する一種の恐怖を置土産にした」に過ぎぬことを承認し、又「その經驗に依つて人々は少くとも現存の經濟秩序の中に於て經濟の問題は勢力の問題であるよりも、より多く市場の問題であることを痛切に教へられた」といふて居る。

(邦譯五一六頁、原著三一四頁)

又社會主義への道を論ぜる最後の第四編に於ては次の様なことを言つて居る「何れにしても社會主義者達が單に階級的利益のみを羅針盤として進む場合に、嘗てマルクス主義者が考へて居た様にもつと遠くを見透した目的への努力とは全然獨立に、辨證法の機能が彼等の政治的行動に其歴史的意味を與へるものではない。私達は社會主義を意識的に創造せねばならぬ」。(邦譯二八三頁、原著一七三頁)然かも之を造る爲に「經濟改革か經濟革命か」の間に面する時ラングウアーは必ずしも後者に組しない。がさうかと言つて斷然前者を採るのではない。個々の改革が全體の進歩の敵となる怖れがあるといふので有害の状態を少しも緩和しやうとせぬ根本的革命主義が愚であると同じやうに何んな小さな進歩にでも常に必ず應と答へて新たな創造への意志が喪失される危険を少しも顧みない根本的改革主義も同じく間違つて居る。けれどもラングウアーに依れば「革命的方法を適用すべき場合は唯々新な諸可能性が充分に成熟して其結果それらを作用させる爲には單に一つの法律行動を必要とするだけである場合、もしくは舊い諸形態が既に充分死滅してそれを除去しても社會の體軀に根本的な害を與へない場合に限られて居る」(邦譯二八八頁、原著一七六頁)であり、然かも「社會主義的經濟組織が充分に完成されて、一法律一手段に依つて實現される様なものは永久に來ないであらう」といふのであるから、彼は先ず明に革命主義を排斥するものと見てよいであらう。彼の意見に依れば社會主義經濟の組織は急速には不可能であるから、社會民主主義者達は長い過渡期に互つて進歩の力たるべき労働者の闘争能力を養ひ、一方資本主義を改革に依つて尙ほ作用能力あらしめつゝ、社會主義的諸形態を試験しつゝ成熟するやうにすることを其任務とすべきなのである。ラングウアーはボルシビズムに就て次の様な皮肉を述べて居る。即ちボルシビズムが「労働者に支配階級の役割を與へたと云ふことは、労働者が完全な資本主義の支配下に於ける時に比して經濟的に暮しが好くはなく部分的には遙に悪かつた(そして現在も悪い)」と

云ふ幻滅を感じさせない爲には、さうした歴史的情勢に於ては確に、考へられ得る最有效の方法であつた。民主的社會主義は此方法——經濟的訓練に酬る爲に壓迫の權利を與へるといふことを拋棄したのである。發展の平和性ばかりでなく、人類の共同性の觀念の維持も、かうした拋棄が歴史に照して可能とされることに依存して居るのである。(邦譯三〇四頁、原著一八五——一八六頁)と。

さて、ラングウアーは何處に現代經濟組織の矛盾を見、社會主義への端緒を求めるかといふに、此點に於ては殆ど總ての社會主義者と同じ様に現代の自由主義的組織に於ける獨占的傾向の増大並に其弊害として失業者の増加や景氣變動の激化等を指摘する、歐洲大戰後に於いて反動的に自由主義思想が蔓延するに至つたにも拘らず、現實の事態は之と正反對に統制的、拘束的な經濟政策が行はれて行く。これは何を意味するであらうか。ラングウアーは斷言して曰く「このことは自由主義思想の復活がたゞ必然的な發展を延引させてゐる許りで、恐らく計畫經濟的改造の方法への健全な批判としては役立つであらうが、それ自ら新たな經濟的生成を表示するものではない事を意味するものであらう」と。(邦譯二〇頁、原著六頁)

ラングウアーは社會の歴史的發展に對して斯様な期待を抱いて居るが、抑々意識的改革を實行し、經濟政策的に資本主義よりも社會主義を尊重するものである以上、此二つの主義の功罪を比較し之を判斷すべき共通の標準、換言すれば經濟組織として何れが合目的であるかといふ共通の目的が確立せられねばならず又此目的實現の爲に採用すべき手段に就て理論的知識が必要である。

社會主義經濟組織の合目的性及び目的實現の爲の手段としての該組織の内部構造に關する説明は從來多數のマルクス主義者の敢て爲し得なかつた所であつて、之を勇敢に試みたラングウアーの著書は其内容の科學的清潔さと相

俟つて大いに賞讃する可きである。

經濟政策上の最高の目的として考へられるものはラングウアーに依れば生産力である。即ち何れがより生産的かといふことである。「或行動を生産的であるといふのは、第一其行動の結果が經濟目的の立場から見て價值があるといふことの別な表現に過ぎない、此經濟目的を如何に決定するかといふ事が問題なのである。そこで消費者の欲望の最大可能的満足を経済目的と考へて之に依つて種々の生産結果の重要性を測定することとするならば問題は明白と爲るのである。」(邦譯一二頁、原著七頁)

經濟政策の目的として消費者の欲望の最大可能的満足といふことが如何なる意味を持つて居るかといふことは此處で論ずる必要はない此短い紹介文に於ては單にラングウアーの意味する儘に受取つて置かう。

與へられたる此經濟目的に照して兩種經濟組織の優劣を比較し計畫經濟組織の爲に論述せるものが本書の主たる内容を爲して居る。

此場合何人にも當然一つの疑問が起つて来る。即ち經濟の歴史的發展の方向をと經濟政策的判斷を行つた結果が顛倒を來たしたならば何うなるのであらうか。社會主義は歴史的必然であるとして之を其儘受入れて仕舞ふならば、假に交換經濟組織の側に有利に下された判斷は之に對して如何なる意義を有するであらうか。ラングウアーは此點に就て唯物決定論的な見方を採らず、人間の合目的的意思と其行動とが「非合目的的なものを除去して合目的なもの」を發展せしめやうとする經濟の傾向は、種々の障害に妨げられるとは言へ意外に強いものである」と言つて居る。(邦譯二〇頁原著六頁)

所でラングウアーに取つて幸なことに交換經濟は其幾多の功績にも拘らず生産力減退の途を辿ることを餘儀なく

されて居ると見られるのである。即ち経済的自由主義は必ず獨占を生むものであり獨占の結果は獨占の無い場合よりも價格を高度に維持し且つ生産物量を引下げ利用する可きは生産力の利用が不充分と爲るのである。又無統制なる生産計畫は一方に於て過度の投資計畫を齎らし後續資本の不充分の爲に必ずや恐慌を惹起するのである。しかもカルテルやトラストは恐慌に對する防衛たるよりも寧ろ景氣變動に對して益々感受性の度を加へるに役立つものと看られる。固定經費の増大に依る生産の伸縮性の減退は即ち之である。

吾々に取つて最も興味を惹くのは資本主義の批判よりも寧ろランダウアーの特異なる社會主義の經濟組織である。彼に依れば此社會には企業を管理する國家の職員と該企業に従事する企業所屬員との外には階級はないのである。此社會に於ては資本家の特殊利益は労働者の其企業に對する特殊利益に依つて代へられる。が、一方に於て過度の集中主義のすべてに共通なる中央獨裁の弊を考慮して組合的社會主義の色彩を著しく濃くすることを忘れない。即ち企業管理者は其企業の労働者に對して制限的責任をもち、同時に其指導的職員は特殊利潤の分配に参加し得るのである。

ランダウアーは一切の企業を國家の經營に委ねんとするものでなく「社會主義經濟機構の氣孔中に多少の私的企業が存続することを承認する」。

社會主義的經濟理論として今日最も興味ある研究の對象となつて居るものは價值又は價格の問題である。消費者の需要に常に追隨し其強弱に應じて欲望の満足を計ることは如何にして之を行ふのであるか。資本主義的組織の下に於ては財貨の價格の高と企業利潤の大小が之の指針と爲る。之に對するランダウアーの解答は頗る心細い「流通經濟が實驗に依つてのみ正當な價格を見出すと同様に高度の計畫經濟も大體の企畫をした後に價格の個々の決定の

爲に個々の財貨の部分を實際に一の生産から他の生産へ動かしてその新しい組合せのもつ一層高い效用に依つて該財貨の重要性の大きさを如何に高め得るかを觸れつゝ試みなければならない」と。(邦譯一九七頁原著二二〇頁)

信用制度に就ても彼の説く所は不安である。即ち企業の國家管理と並んで信用の獨占を國家の重大權利と考へるにも拘らず信用の要求量が幾何であるかの決定は大體に於て、國家の手にある様に組織されるに過ぎない。労働者が所得の一部分を貯蓄し投資することは大なる問題ではないとランダウアーは考へて居る。

以上所々筆者の興味を惹いた所を引用しながら此書の解説を試みた。此書全體を通讀しての感想を述べるならば、筆者は此處にアドルフ・ウェーバの批評の最後の一言を以て之に充てることに躊躇しない。即ち曰く「社會主義的計畫經濟が三世代に亙る不屈不撓の勞作にも拘らず今尚ほ一大暗黒に包まれて居ることは、正にランダウアーの著書が公平なる讀者に示して居る」(Weltwirtschaftliches Archiv. 1933. H.I.)

ランダウアーの考へる社會主義社會は消費の自由や職業の自由が許される許りでなく、私有財産も認められる様であり、部分的ではあるとしても個人企業の經營が認められるのである。従つて賣買も貸借も利潤の爲め競争も當然起つて來るに相違ない。然る時は社會主義と言はれる本質は何處に在るのであらうか。

(昭和十一年一月十九日夜記)